

グルジア紛争が国際社会に及ぼす影響

トルコ・イスラム圏担当: 佐々木良昭主任研究員

:グルジアが始めた

— 今回のグルジア紛争は、ロシアが最初に侵攻したのではなく、グルジア側が始めたということをおぼろげに忘れてはなるまい。そのことは、グルジアの単独の意思なのか、あるいは他の国の関与によって起こったのか、ということの判断につながる。

— 述べるまでもなく、グルジアにはロシアを相手に、単独で戦争を始めるだけの動機も、勇気も、軍事力もなかった、と判断するのが当然であろう。つまり、グルジアをしてロシアとの軍事衝突を覚悟しなければならない、紛争を起こさせた国がグルジアの背後に、存在したということだ。

— それはアメリカということになろう。グルジアのサーカシビリ大統領とアメリカ政府の間には、極めて強固な信頼関係があることを、思い知らされた出来事であった。

:何故始めたのか

— ではなぜグルジアが、あるいはアメリカが今回の紛争を、起こしたのであろうか。それはアメリカの東欧諸国へのMD配備、ロシアに対するけん制、ロシアに対する挑発とその後、ロシアを窮地に立たせる、といった思惑からであろう。

:ロシアはどう対応したか

— ロシアはグルジアが侵攻する以前の段階から、それを予測していた模様だ。迅速かつ、一定規模の軍事行動が起こったことから、ロシアが状況をほぼ正確に、把握していたことが分かる。

— 当然の結果として、ロシア軍が本格的な反撃に出ると、状況はロシア軍にとって、完全に有利なものとなった。

:欧米の反応は

— サーカシビリ・グルジア大統領がアメリカ留学であることから、達者な英語と宣伝ノウハウを持っていた。このサーカシビリ大統領の能力を、いかんなく発揮させたのが、アメリカのマスコミだった。

— アメリカは彼の宣伝工作を支持し、ロシア非難を展開した。欧州諸国、なかでイギリスは、このアメリカのグルジア支持の立場を受け入れ、グルジアに同情する報道を、繰り返した。

:周辺諸国の反応は

—グルジアに対するロシアの軍事対応を見た周辺諸国は、一様にロシアが拡大主義であるという、過去の暗いイメージを思い起した。

—その結果、周辺諸国は一様に、ロシアとの摩擦を生まないように、という消極的な反ロシアの立場を示した。

—周辺の一部の国は、積極的にNATOやアメリカとの、関係強化に動いた。アメリカのMD受け入れ国や、NATO参加希望国が、公然と現れている。

:今後どう影響していくか

—周辺諸国のある国々は、段階的にロシアとの距離を、開いていく方針であり、アメリカ・NATOとの関係を、強化していく方向に動くであろう。

—周辺諸国の多くは、最も安全な自国防衛のための、外交を今後展開していくものと思われる。

—そのためには、何枚ものカード(関与国)を手にするであろう。それらの国々は、EU、イギリス、ドイツ、フランス、トルコといった国々であろう。

—グルジア紛争が世界全体に、与える影響は多岐に渡ろう。第一に、現存する国家を、外国が軍事介入し、分割し、その一部の独立を認めるということが、欧米とロシアとの間で、今後多くみられるようになるだろう。

—グルジアの周辺諸国、中央アジア諸国、東欧諸国は列強国との、特別な関係構築(庇護を受ける関係)に、向かうものと思われる。

—中長期的に考えると、列強諸国によって世界の弱小国は、分断されていくのではないかと。

—そのことは、これらの分断国家間や隣国間での紛争が、多発する時代に、世界は入っていくということだ。